

# 現代アートが生み出すコミュニケーションの可能性についての研究 ～現代アート展「船／橋 わたす 2019」の開催を通して～

研究代表者：堀部 七彩

共同研究者：小川 美陽・四方 遼祐・大西 佑弥

櫻井 莉菜・瀧澤 晟司・舟山 香織・湯浅 創太

## 目次

1. 研究背景
2. 研究目的
3. 展覧会当日までの流れ
4. 展覧会の成果と課題
  - (1) 運営について
  - (2) 現代アートの力で様々なコミュニケーションを生み出す
5. 今後の展望と課題

## 1. 研究背景

奈良県立大学は全国的に見ても小さな公立大学で、「地域創造学部」の一学部しかない。学生はフィールドワークとして地域やまちに目を向け人々と交流し、その地域に元気を与えている。しかしその一方で、奈良県立大学や周辺地域に対して意識を向けられている人々は多くない。

現在、奈良県立大学は校舎の新設に向けて大規模な工事が行われている。開学時から形が変わらないというグラウンドが潰れ、見慣れない大きな重機があふれている。自由に生い茂っていた木々は機械で伐採された。学生生活の歴史が刻まれていた4号館はきれいに掃除され、ただの古い校舎になってしまった。奈良県立大学は、着々ときれいで無機質な大学に変化している。それに対して関心を向け、自分が所属する組織や自分が身を置く空間の変化に気づいている学生はいるだろうか。

変化の過程にある奈良県立大学に目を向けることで、自分の周りを取りまいているものを改めて見つめ直してほしい。そこで西尾研究室では、現代アート展「船／橋わたす 2019」を開催し、現代アートの力で過去と現在、空間と行為、日常と非日常、まちと大学などの関係を改めて見つめ直すとともに、様々なコミュニケーションを生み出すことを試みた。

展覧会名の「船／橋わたす」は、本学が位置する船橋町の名にちなんで、さまざまな価値観をのせた作品という「船」を渡し、異質なもの同士をつなぐための「橋」を渡すというイメージで2017年度に名付けられたものを継承している。

## 2. 研究目的

ゼミの一環で行うこのプロジェクトには2つの目的がある。一つ目は、ゼミ生がアートプロジェクトの運営方法を学び、身に着けること。教員の指導のもと、展覧会の概要や作家招聘、予算管理、会場設営（搬入・搬出）などの展覧会に関する基本的なことから、広報などのメディアや関連イベントの企画について学ぶ。またアートプロジェクトの先行事例として、大阪市西成区にある二つの文化施設、kioku手芸館「たんす」とココルームへの見学を行う。

二つ目は、奈良県立大学に現代アートの力が加わることで、過去と現在、空間と行為、日常と非日常、まちと大学などの関係を改めて見つめ直すとともに、様々なコミュニケーションを生み出すこと。大学は地域の中にあり、様々な人が出入りし、学び交流する場所である。大学、学生、地域の人、招聘作家など多くの人々をプロジェクトに積極的に巻き込み、現代アートを通して文化交流を行うことで、奈良県立大学の再発見につなげる。

## 3. 展覧会当日までの流れ

西尾研究室のゼミ生は、展覧会で自分自身の研究作品の展示を行うことに目標に、開催に向けて2019年5月から議論を進め、7月には各自の研究作品の中間発表を行った。9月には学生の個人作品や案を持ち寄り、より良い作品にするため意見を交わすことで作品の完成度を高め合った。作品のテーマは様々で、写真やインスタレーション、映像などの手法を用いた作品<sup>1</sup>がみられた(写真1、写真2)。

各自の作品制作と並行して、展覧会のコンセプトに合った作家について調べ、議論し、3名の作家を選出した。今回招聘した黒川岳、澤田華、長沢優希は、それぞれ彫刻やパフォーマンス、写真や映像、インスタレーションといった手法を通して、見る人に新しい認識の在り方を提示する新進気鋭のアーティストである。順に大学へ調査に来てもらい、ゼミ生が奈良県立大学に関することや学生の生活を語りながら学内を案内した。招聘作家が大学を見る視点は新鮮で、ゼミ生も新たな大学の一面を見ることができた。

広報は、デザイナーの佐藤豊と議論をすすめフライヤーを制作した。デザインコンセプトとしては、展覧会名の「船／橋」の文字を区切るスラッシュをとっかかりにして紙面を斜めに区切ることで、ある意味でアートと日常が分断されている現状と、思いがけない発想で何気ない日常生活に新たな気づきを得られるような、観覧する人たちにアートを通して独特な体験を味わってもらいたいという意図が込められている。また大学で開催することや展覧会名「船／橋 わたす」という字面や語感のユニークさから、文化祭や地域の催し物にとらえられる可能性があることから、あえてニュートラルに「現代アート展」ということを伝達するデザインになっている(画像1)。

今年度は、ゼミ生が船橋商店街の店舗を訪問しフライヤーを配布した。フライヤーを直接手渡すとともに開催について伝えたことで、多くの人とコミュニケーションをとることができた。地域の人と話をする中で毎年来場している人の存在を知り、この展覧会が地域と大学をつなげていることを実感した。

また、会期前にボランティア向けの内覧会を行い、作品の背景や意味をゼミ生自身が解説した。ボランティアが作品について知り、作品解説を出来るようにすることで、会期中にボランティアと来場者が対話できるようつなげた。

アートプロジェクトの先行事例として、大阪市西成区にある文化施設、kioku手芸館「たんす」とココルームへの調査訪問を行った。Kioku手芸館「たんす」は、「ものづくり」を軸とした「創造の場」が、新たな公共の場として、地域住民／市民に必要とされ、支えられる場を目指すプロジェクトである。西成に暮らす地域のおばちゃんたちが週1～2回集まり、手作業で不要になった布などを使って衣服やアクセサリーの制作と販売を行っている<sup>ii</sup>。訪問したゼミ生もいつの間にか作業に参加させてもらい、異なる世代間でも会話が弾んだ。手作業を通した自然な「場づくり」が行われているという印象を持った。単純に衣服を作っているのではなく、人と人との繋がりの中で衣服を作っており、服を作るのが楽しい以上に、一緒に同じ時間を共有しているのが楽しい。そういう「場づくり」が行われている。

また同じく西成にあるココルームは、喫茶店とゲストハウスのふりをして地域に根差しながら、様々な人々と出会い、表現とまなびの場をつくることを目的とした場所である<sup>iii</sup>。ここでは西成のステレオタイプなイメージに固執しない、コミュニケーションを生むきっかけや全ての人を受け入れる仕組みが作られていた。

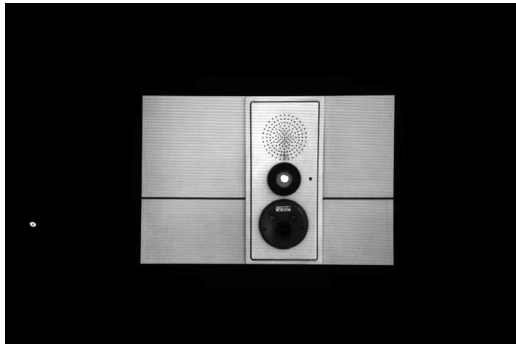


写真1 大西佑弥《警鐘を鳴らす》



写真2 小川美陽《逃げ去った時間を追う》



図1 「船／橋 わたす2019」フライヤーデザイン

## 4. 展覧会の成果と課題

### (1) 運営について

今年度が3回目の開催だったこともあり、学生主体の展覧会運営をすることが出来た。ゼミ生が常駐し来場者に解説ツアーを行ったことや、ボランティアが作品解説をしたことなど、運営者としてのスキルが身につけてきたことは成果の一つである。一方で課題も残る。今回初めて実施した来場者アンケートの回答から、動線や展示方法に工夫が必要だといった意見がいくつか見られた。ゼミ生もこれまで開催してきた学内での展覧会のやり方を無意識のうちに模倣している部分もあり、鑑賞者がどのような心境で、大学構内という会場をどのように受け止めて展覧会を鑑賞していくのか、鑑賞者目線に立って企画・運営する必要性を感じた。

また招聘作家の音を発する作品に対して、近所の住民から「うるさい」と苦情の電話が守衛室に入るという一件があった。下記で詳しく述べるが、展覧会の趣旨と照らし合わせながら、作家や大学総務と相談しながらゼミ生同士で議論を重ね、対応を考えたことは貴重な学びとなった。

### (2) 現代アートの中で様々なコミュニケーションを生み出す

今回の展覧会の特徴の一つは、4号館の一部が耐震の関係で使用できなかったのにもかかわらず、大学全体を使用して作品展示をしたことである。4号館は北館と南館の二つに分かれており、昔に建てられた北館が耐震基準を満たしていなかった。そのため展覧会開催の約1か月前に、4号館北館の全面使用禁止が大学として決められた。すでに北館を使って個人作品の展示を予定していたゼミ生も数名おり一時は混乱したが、ゼミ生は自分の作品コンセプトを最大限に発揮できる場所を各々探した結果、部活でしか使用されない4号館南館や普段目の向けられていない空間や部屋での展示を実現させた。

会期中、解説ツアーをする中で奈良県立大学の学生からも一般の来場者からも「こんなところがあるんだ」という声をよく聞いた。大学の近くに住む女性は「奈良県立大学に来たことはあったが、この展覧会がなければこの場所は知らないままだっただろう」と話してくれた。それは学生にとっても同じことが言えるだろう。奈良県立大学は大学の機能が一部の校舎に固まっているがゆえに、普通に大学生活を送っているだけでは訪れない場所や目に留めない空間が存在する。特に取り壊しが決まり部室棟としてしか使用されない4号館はその存在自体が薄れている、もしくはただの古くて汚い校舎と認知されているのではないだろうか。大学の姿が変わる前に、現代アートを通して鑑賞者に空間や場所の再発見をしてもらうことができたといえる。

他にも、鑑賞者とのコミュニケーションをとることを目指して、ゼミ生が受付に常駐し出来るだけ多くの鑑賞者に解説ツアーを対面で行ったことも特徴の一つである。アート関係者や奈良県立大学の学生、船橋商店街の人をはじめ多くの人と対話した。ゼミ生と様々な価値観や考え方を持つ人たちが作品を通して、コミュニケーションをとり対話する姿が見られた。筆者が特に印象的だったのは、もう講義がなく学校にほとんど来ない奈良県立大学の4年生が、わざわざ土曜日に足を運んでくれたことである。解説ツアーをする中で、互いの4年間の学びや研究を踏まえたうえで議論をすることができた。同じ学部で同じ講義を受けてきたが、視点や考え方の違いに刺激をもらった。この展覧会がなければおそら

く話すことがなかつただろう。

また、招聘作家によるゼミ生作品の講評会を行い、招聘作家からゼミ生の個人作品に対する意見や改善点などを聞くことができたことも成果の一つである。

しかし課題もある。(1)でも述べたが、招聘作家のパフォーマンス作品に対して近所から守衛室を通して苦情がきた。この展覧会は「現代アートの力で様々なコミュニケーションを生み出す」ことを目指している。このままでは、苦情を言ってきた側と主催者である私たちとのコミュニケーションがないままだ。そこで大学総務課へ出向き事情を説明し、作品を引き続き展示したいことと、その人に実際に来てもらって対話のできる準備がしたいということを伝えた。その方針に総務課も賛同してくれた。しかし、電話の主が特定できていないため、「あいちトリエンナーレ 2019」でのプロジェクト《Jアートコールセンター》(高山明)<sup>iv</sup>を参考に、もう一度、招聘作家のパフォーマンスをして電話がかかってきた場合はゼミ生が対応できるような準備を整えたいと、パフォーマンス作品を決定した。結果、苦情の電話は来ず、電話をしてきた主とはあらたな視点の共有もアートを介したコミュニケーションもできなかった。

## 5. 今後の展望

今回を含め、現代アート展「船／橋 わたす」はこれまでに本学で3回開催してきた。開催を重ねるたびに、少しずつ「船／橋 わたす」に関わってくれる人たちとの輪は広がってきている。通りがかりに運営や作品づくりに協力してくれる人もいる。毎年来場してくれる人がいたり、過去に参加した招聘作家が足を運んでくれたり、この展覧会が奈良県立大学に確実に定着してきていることを実感している。その一方で、上記に述べた苦情電話の件のように、新しい表現を提示するためには、より多くの人と対話しコミュニケーションをとりながら企画を進める必要性も感じている。具体的には、ゼミ生だけでなく船橋町の住民と一緒に展覧会を企画・運営するといったことが考えられるだろう。アートの力で様々な人と協働することで新たなコミュニケーションが生まれるとともに、今まで考えても見なかったことやできなかったことをともに発見し創造する可能性に向けて、今後はさらにこの輪を広げ、多様なコミュニケーションが生まれる場となるような展覧会をしていきたい。

## 脚注

<sup>i</sup> 学生の作品テーマは以下の通りである。

4年 小川 美陽 《逃げ去った時間を追う》

四方 遼祐 《生活を見つめる》

堀部 七彩 《「性」を写し出す下着》

3年 大西 佑弥 《警鐘を鳴らす》

櫻井 莉菜 《対話による想像》

滝沢 晟司 《「見る／見られる」関係》

舟山 香織 《日常、あるいは非日常の境》

湯浅 創太 《スマブラの競技シーンにおけるランダム性についての考察》

<sup>ii</sup> Kioku手芸館「たんす」HP

[https://brk-collective.net/kioku\\_tansu/](https://brk-collective.net/kioku_tansu/) (2020年1月23日閲覧)

- iii NPO 法人「こえとことばとこころの部屋『cocoroom』 HP  
<http://cocoroom.org/cocoroom/jp/> (2020年1月23日閲覧)
- iv 「Jアートコールセンターから見えた限界と可能性。高山明に聞く」美術手帳  
<https://bijutsutecho.com/magazine/interview/20779> (2020年1月23日閲覧)